

第二百五十九話 歴史修正主義者非難を甘受

思い込まされ・刷り込まれた従来の定説に、異議を唱えると歴史修正主義者(revisionist)とのレッテルが貼られる。実証可能な事実を論拠に新たな視点を提供することは極めて重要なことだ。非難など恐れる謂れは全くない。

大東亜戦争についてそのような観点から刺激を与えてくれたのが、有馬哲夫著「こうして歴史問題は捏造される」である。意を尽くせぬかも知れぬが、要点を記す。

○歴史認識問題にかかる中韓の特異性

1 中国と韓国 「建国イデオロギー」が重要

中国共産党の建国イデオロギー：共産党が帝国主義日本を破ったと
韓国の独立神話：帝国主義日本に対し独立運動を戦って、建国達成と
何れも事実とは異なるが、斯くあらねば自らの正当性を主張できない。
建国イデオロギーは即ち反日

2 歴史教科書は現政権正当化の道具

カイロ会談の署名は蒋介石、韓国の独立運動の実態は？
独立国・戦勝国神話にしがみつくと韓国（虚構を作り上げ、それに酔う？）

3 中韓は、日本のナショナル・ブランディングの毀損を狙っている。

○歴史修正主義者とのレッテル貼られた氏の持論（と推察）

自虐史観によって定説とされていることを修正しようとする、「歴史修正主義者」のレッテル貼りが横行している日本の現状

● 氏の提唱する「日本の侵略戦争論」(179p～181p)

1937年以降の対中戦争と1941年以降の対米(連合国)戦争とを分けて考える必要
侵略戦争と防衛戦争に代えて、攻撃的戦争と防衛的戦争に（米公文書の用法準用）

● 米国の先制攻撃の脅威

米国は二大洋海軍法を制定して軍備増強急ピッチ、日本のみが戦争準備をしていたかのごとき誤解がある。(184p)

● ハルノートを呑んでも先制攻撃の脅威は続いた(184p)

● 歴史の捉え方、二法：静態的及び動態的捉え方(185p～187p)

「歴史に限らず物事を捉えるとき、二つの捉え方があります。一つは物事が確定して、静止しているものとして捉えるものです。これを静態的捉え方といいます。前の例ですと、日本がアメリカを一九四一年一月八日(現地では七日)に先制攻撃したことが歴史的事実として確定していますので、必ず一月八日に日本側から先制攻撃がなされるものと考え、そこに至るまでの日本側だけの動きを時系列で追い、なぜ先制攻撃までして戦争を始めたのかと日本側の開戦責任だけを追及します。日本の現代史研究者がよくやっていることです。

終戦も、一九四五年八月一五日に確定していますので、その日に戦争が終わるという前提で、それまでの日本側の終戦の動きを時系列で追います。日本と連合国のいろいろな動きをみて八月一五日ではなく、それより早く終わることも、もっと後まで伸びる可能性もあったとは考えません。(中略)

これに対して動態的捉え方とは、日本が開戦準備をし、アメリカもまた大西洋と太平洋の両洋で同時に戦争できるよう軍備拡張を急ぎ、イギリスもまたアメリカをあの手この手でヨーロッパの戦争に引きずり込む工作をして、事態がダイナミックに動いているなかで、いろいろなことが起こりうる可能性があり、「結果として」日本の先制攻撃があった、と考えることです。(以下略)

(終戦の動態的捉え方については割愛)

(了)